

を巡って自由間接話法で語られたベルクソンの記述において、主体の外部とのアクセスを示す認知とそれに伴う危機の在り方がスキズとは全く異質であることが認められる。Dzはこのことにどこまで自覚的だったのだろうか？ フーコーが述べた「世紀はドゥルーズ的なものになるだろう」という予言的言辞の意味は再検討されねばならないだろう。

3. なぜ賀川豊彦は排除されたのか ——信仰と科学とのはざまで——

中塚尚子
(立教大学現代心理学部)

大正・昭和期のキリスト教思想家で社会運動家の賀川豊彦は、戦前の労働運動、農民運動、無産政党運動、生活協同組合運動において、いずれも重要な役割を担った。同時に作家としての活動も行い、1920年に出版した自伝的小説『死線を越えて』が三部作計400万部を売り上げるなど、多くのベストセラーを著した。

生涯を通してキリスト教における博愛の精神を実践した賀川は、「貧民街の聖者」とし世界的な知名度も高く、1954年から1956年まで3年連続でノーベル平和賞候補者となった。また近年になって、1947年と1948年にはノーベル文学賞の候補となっていたことも判明した。

しかし、しばしばその名前の前に「今や忘れられつつある」と記されることからわかるように、その思想、活動、文学作品は正しく検証されるどころか、急速に歴史の上から消し去ろうとされつつある。それはいったいなぜなのか。

現実的な次元では、賀川が組織を作ることを好まず、その業績を継承、顕彰する者がいなかったことが大きいと思われる。ただ、それ以外にも賀川が存在したいが、近代化を遂げようとする日本社会や日本キリスト教にとって不都合だったとは考えられないだろうか。

たとえば、賀川に特徴的なのは、多岐にわたる活動と同時にその独特の神学である。彼はキリスト教に入信した十代の頃より、「宇宙悪」と自ら名づけた問題に取り組み続けた。賀川にとって「宇宙悪」は破壊的をもたらす悪魔ではなく、ベルクソンの「創造的進化」における élan vital にも共通する自然の契機、あるいは科学の全面的な肯定とも考えられる。それはおよそ近代の日本キリスト教とは相容れないものであっただろう。また、「弱者に徹底的に寄り添う」という賀川の態度に表面的には共感していても、徹底しすぎると逆に

さまざまな不都合を被った人たちもいたはずだ。そして、賀川豊彦を排除することで成立した日本近代社会ならびにキリスト教は、現在になってその隠されてきた病理性を露呈し始めていると考えられるのである。

4. 日本のポストモダンの先駆者、山本七平

奥村克行¹、風野春樹¹、金川英雄^{2,3}
(1 東京武蔵野病院, 2 横須賀市立うわまち病院,
3 昭和大学精神神経科)

山本七平の独創的な日本研究は高く評価されている。彼は固定的なイデオロギーに無意識に拘束されている近代日本人を分析し、そこから脱却する方法を考えた。

山本の到達した結論は空気と水の原理であり、日本人がその時々自ら依って立つ思考及び行動の原理・原則としての空気、常識、当たり前等とは別に、メタなレベルで空気の原理に支配されていることを発見した。空気から逃れる方法として、自由、個人、自覚、主体性、自己の思想の意識化を見出した。その方向は現代思想の進んだ道であった。

山本の創造性の背景には、熊野で大逆事件の冤罪被害を受けた熱烈な新教徒の家庭の3代目のキリスト教徒として生まれ、内村鑑三の孫弟子であり、大学中途で下級将校としてフィリピンに出征し全滅部隊を唯一人生に残り、戦犯の冤罪容疑に苦悩した等の特異な経歴がある。山本は日本社会の中で越境者や異邦人として生き、自身のライフワークである聖書の研究と啓発のため、聖書学関連の出版社を経営し、アカデミズムから自身を峻別し、独学で学問し、在野の学者であり続けた。これは現代思想を作った人々が社会的マイノリティーであったことと重なる。空気の研究の結論は、彼自身の生き方、思想的な結論でもあったが、そこには自分自身が近世の町人学者や近代的な教義主義者の系譜にも連なる知識人として、小林秀雄やドストエフスキーの影響が垣間見える。文献学や複対立的対象把握等の方法を駆使し、結果として構造主義からポスト構造主義に近接した。

山本は近代日本の歴史と文化が生んだ特異点であり、彼と社会のマトリックスもまた冤罪、天皇、聖書等、様々な結節を作る。言論界が近代主義の観念論的空気の中にある時、山本は社会通念を現代的な構造主義的手法で解体・再構築することで、批判・相対化し、その後のニューアカデミズムから現代へ至る流れの中で、ポストモダンの先駆者としての役割を果たした。